

国民健康保険 高原病院 記念文集

「発行にあたって」

おかげさまで

70th ANNIVERSARY 地域と共に

国民健康保険高原病院「通称：高原町立病院」は、昭和25年12月1日の開設以来、令和2年12月1日で70周年の記念すべき節目を迎えました。

こうした中、地域の方から、「以前、母親が町立病院に通院や入院を繰り返してきた中で、子供たちや自分自身にいろいろな思い出が築けた」との熱い想いが綴られた一通の手紙が届き、その中で、「私の他にも町立病院での思い出や出来事を書きたいと思っている方がいるかもしれないので何か紙面に載るような記事文を募ったらどうですか」とのアイデアをいただき、偶然にも創立70周年という節目を迎えることが重なって、この企画を行うこととなりました。

名誉町民（元町長）の横田修（よこたおさむ）様、前病院長の莫根隆一（あぐねりゆういち）先生をはじめ、7名の皆様に心温まるご寄稿をいただき、取りまとめた次第であります。是非、皆様にご一読くださいますようお願い申し上げます。

結びに、コロナ禍で悩ましい日々が続いておりますが、職員一同、地域に必要とされる元気な病院を目指し力を合わせて取り組んで参りますので、これからもご指導いただきますようお願いいたします。

令和3年7月15日

開設者（町長）
病院長
広報部長

高妻 経信
池田 直徳
相村 崇成



『高原病院の思い出』

第14～18代町長 横田 修

○ はじめに

国民健康保険高原病院が創立70周年を迎えられますことをお喜び申し上げます。



私が、町長に就任しました昭和52年10月当時、高原病院

は第7代院長の入部先生と鹿児島大学から派遣された3か月交代の外科医2人と内科医1人の体制でした。町としましては、病院経営で一番大事なものは「医師の先生方が継続的に勤務していただく体制を確立せねばならない」と考えていました。そのためには、大学のご理解とご協力を得ることが開設者として最も大事な仕事であるということと、次には町立病院としての医療設備を整備し、先生方が不自由なく診療に従事していただくよう予算面の措置をせねばならないということが開設者の責任であろうと考えました。

○ 第7代院長（入部先生）～第8代院長（川井田先生）の思い出

入部院長先生は、就任以来5か年間の勤めを果たされ、川井田先生が第8代院長として就任いただき、以降約8年間の勤めを果たしていただきました。

川井田先生は、その後町内で開業され、老人福祉施設も併設され、医療、老人福祉事業が順調に繁栄・発展されておりますことは同慶に存じますと共に、多くの町民がその恩恵をうけておりますことは大変ありがた

いことでもあります。

川井田先生ご就任中だったと思いますが、鹿児島大学第二内科の医局長がお見えになり、「今後、内科医の派遣を中止する」との言い渡しがありました。余りにも突然のことで言葉を失いましたが、「ない袖は振れない」との言葉を残して帰られました。

病院の存続に関わる重大なことで心配しましたが、意を決して、日曜日に第二内科の橋本教授の自宅に参上しました。教授もびっくりされた様子でしたが、「先生、何とかしてください」と粘りに粘って懇請しました。私の意が通じたものでしょうか、「何とかしましょう」との返事をいただきました。結果は、「3か月ごとに交替」という体制でした。その後も陳情の繰り返しで、6か月交替とか1年交代へと良くなっていきましたが、厳しい状態が続いたと思います。

○ 第9代院長（莫根先生）の思い出

当病院の院長は、鹿児島大学第一外科出身の方が就任される慣例になっていましたので、後任の院長を第一外科へお願いすることと致しました。当時第一外科医局長の野村先生は、陳情の都度お会いして顔馴染みでしたので、野村先生へ、高原で腰を据えて勤めていただく院長をお世話いただきたい旨を懇請いたしました。「私に任せますか」との言葉でしたので「先生にお任せいたします」と申し上げました。結果、野村先生の「私の秘蔵っ子！」という言葉で第9代院長として莫根隆一先生をお迎えすることとなりました。以来32年間、院長として職責を立派に全うして戴きましたことは、町として、町民としてこの上ない幸せにあり、感謝に耐えないところであります。

この機に、私の在任中の莫根先生の業績を辿ってみたいと思います。

先生が始められた事業に、「人間ドック事業」があります。病気の早期発見が目的ではありますが、それは、国民健康保険への安定的運営に寄与することになります。「人間ドック」は、治療ではないので保険の適用がありません。当時は、経費として2万円かかりましたので、受診者の負担が大きいことが問題になりました。そこで行政としては思い切って90%の補助で自己負担を2千円と致しました。

行政の事業推進とは難しいもので、ドックの受診率が伸びないという問題が出てきました。事業の趣旨が徹底しないこともありまじょうが、「自分は元気でドックなんか必要ない」とか、「病気発見が怖い」等が主な原因であったようです。しかし、受診者の中で病気が発見され命拾いされた方が沢山おられますことは、事業の成果として特筆すべきことでしょう。

お聞きしますと現在、年間約1,500人の受診者があるそうです。町民の方が約半数、半数は町外の方とのことです。せっかくの事業ですのもう少し多くの町民の方、中でも未受診の方、即ち人間ドックを一回も受けていない方が受診されるとよいのではないのでしょうか。

莫根先生は病院改革にも意を注がれ、診療開始時刻の繰り上げ、待ち時間の解消等サービスの向上・改善を図っていただきました。また、職員の勉強会の開催、スタッフの調査研究の学会発表等、画期的事業を積極的に進めていただきました。先生は消化器外科の専門ですが、当時は若くて大手術等も積極的に取り組まれ、数多くの人々が恩恵を受けたことは広く町民の知るところであります。

先生の温厚・誠実なご人格と数々の業績は大学でも高い評価を受けておられ、派遣

される若い医師の方々が競って高原病院を希望された時期のあったことは特筆すべきところであります。

このように先生の人と成りと病院運営の実績は、県内外の大規模な病院にも広く信頼を得ており、莫根先生からの紹介患者は各大規模病院でも丁寧に受け入れていただいたことは、大変ありがたいことであります。

莫根先生が院長として32年間、町民のために尽くして戴きました功績は筆舌に尽くし難い大きなものであります。町民の一人として心からのお礼を申し上げ、今後も末永く高原病院をお見守りご指導戴きますことをお願い申し上げます。

話は変わりますが、市町村合併論の検討が進行する中で、高原町も野尻町も小林市に合併という結論がほぼ集約されつつあった時、突如、高原病院を民営化することが小林市側から提案され大問題となりました。町はいかにすべきかを座談会を開いて町民の声を集約されましたが、結果は合併より、高原病院の存続が大事だとの意見が多かったようです。

この結果を受けて議会でも合併をせずに高原病院を存続するとのことが議決されました。これは町としての最終の意思決定であり、町民が忘れてはならない重要な歴史的行政事項であります。

○ 終わりに

高原病院は、先人の方々の苦勞・努力により70周年を迎えることができました。少子高齢化、人口減少、新型コロナウイルスの蔓延等、医療業界は個人病院、公立病院問わず厳しい現況に置かれております。加えて医師不足が今後とも最大の問題点でありまじょう。町立病院の存続を選択した我々は、こ

の機会に、これ等の問題解決を如何にすべきかを真剣に考えるべきではないでしょうか。最も大事なことは、医師の先生方が毎日を楽しみ、生き甲斐を感じて診察していただくような明るい高原病院の環境を整えて行くことではないでしょうか。そのような成果は、大学医学部の信頼を得ることに繋がって行くものと考えられます。

現在高原病院は、第10代院長の池田先生を中心に、業務が円滑に推進されています。

町当局、議会、職員、町民が一体となってそれぞれの立場で高原病院の将来を支えていくことを誓い合う70周年であって欲しいと考えるものであります。

高原病院の限りない発展、ご繁栄をお祈り申し上げ、思い出と所懐の一端を述べてお祝いの言葉といたします。

『高原病院での32年間、御世話になりました』

第9代病院長 莫根隆一

前回の50周年記念誌の発刊から早くも20年が経過したことに驚いております。

この間に首長も朝比奈紀行町長、日高光浩町長、高妻経信町長と変わりました。

いつも御世話になっている鹿児島大学旧第一外科の教授も愛甲孝教授、夏越祥次教授、大塚隆生教授と変わり、旧第二内科教授も有馬暉勝教授、坪内博仁教授、井戸章雄教授と変わりました。



高原病院の最近の医師の異動については、平成29年3月までは鹿児島大学旧第二内科の出張病院として常勤医に勤務して頂きましたが、大学病院の人材確保のため、平成29年4月より常勤医の派遣は中止となりました。常勤医の確保に努め、平成30年4月より2名の常勤医に勤務して頂きましたが平成31年3月、令和2年3月に退職されました。

再度、次期院長と常勤医確保に行政の協力も得て努力していたところ、令和元年11月に池田直徳副院長が次期院長を内諾され、院長代理に就任後は高原町立病院元気化プロジェクトを始動され活躍されております。

さらに、池田直徳先生の院長代理就任とほぼ同時期に蛭原弘明先生が常勤医として勤務され、当院の戦力アップの原動力となっております。

平成元年より開始した人間ドッグ事業は順調に経過し、令和元年までの31年間で受診者総数は54,239人でした。発見された悪性腫瘍の総数は222例で、内訳は、胃癌85例、大腸癌56例、甲状腺癌25例、肺癌17例、乳癌16例、食道癌7例、前立腺癌3例、膀胱癌2例、肝癌2例、腎癌2例、白血病2例、また悪性リンパ腫、胸腺癌、膵臓癌、胆嚢癌、卵巣癌がそれぞれ1例ずつでした。発見胃癌85例において胃癌発見率は0.16%、早期癌は75例で早期癌比率は88.2%でした。

第10代院長である池田直徳先生は、私が困ったときはいつも助けてくれた男気のある最も信頼のおける医学博士です。現在公立病院を取り巻く状況は厳しいものがありますが、患者さんに町立病院にかかってよかったと思われるように、池田院長を中心に病院全職員で心をこめて、地域に根付いた医療に取り組めば必ず道は開けてくると

思います。

最後になりましたが、昭和63年10月1日院長就任から令和2年3月31日の辞職まで多くの方々に支えて頂き本当に有難うございました。高原町立病院が地域の中核病院として輝きつづけることを祈念し筆をおきます。

『この子なのね 小学生編』

小林市在住 赤木春美

娘と息子が、小学3、4年の頃だったと思う。実家の母が町立病院に入院してた時、お見舞いに一緒に行った。2人部屋だったが、隣は空きベッドでセンターテーブルに、ゼムクリップ(小さい方のクリップ)が1つ置いてあった。これが針や刃物なら、私も子供達の手の届かない所へ移動させたのだが、気にも留めず母と話していた時、「いたっ」と言う息子の声に振り向くと、 Consentカバーが一部溶け、息子の右手は黒い線が2本ついたヤケドをおっていた。「どうしたの」と聞くとクリップを伸ばし、Uの字にして Consentに突っ込んだと息子は言った。

慌てて手をひき、1階の外來へと走った。

「ヤケドしました」と看護師さんに伝えると「どこでしたの？」と処置をされながら尋ねられた。「あの、ここで」と私が小声で返事すると、「えっ、ここで?」、「あの、私の母の見舞いに来て病室で」と言うと同様に皆、驚いている。「そりゃ、そうか。病院でヤケドなんて普通しないよね」と考えていると、「毎日、バイキンが入るといけないから、消毒に来て下さい」と言われた。

次の日、日曜だったのか違う看護師さんでした。「どこでヤケドしたの」と聞かれ又、

「町立病院の病室で」と説明する事になった。「明日も来て下さい」と言われ月曜日、息子を連れて行くと「この子なのね!」とカルテを見るなり看護師さんは言った。

私は Consentの修理代を母に払わせる訳にはいかないと、師長さんに「修理代いくらですか?」尋ねると「いいえ、こちらも町立病院はじまって以来の想定外の出来事なので、治療費をお支払いいただく訳にはいけませんので、いりません」との返事でした。

後日、修理に来た電気屋さんが「ゴムぞうりをはいて、下がコンクリートだから大丈夫だったんだよ。畳で裸足だと心臓の弱い子だと命に関わるよ」と言っていたそうで、私はゴムぞうりに感謝しました。

ちなみに息子は母が病気で食欲が無く、点滴をしていると言った所、「ばあちゃんは、光合成をしているの?」と聞いたそうで。食べないで生きているから、当時習った理科から考えたのか。母は亡くなるまで何度も町立病院にお世話になりました。その都度、孫の息子の事を話していたらしい。町立病院でヤケドをした子供として「この子」と看護師さん達に広まったのである。

『孫と母と』

小林市在住 赤木春美

私が小さい時より母は病弱で、何度も町立病院に入院し、その時私と一緒に お見舞いに来てた娘は介護士として働いており、母が娘の職場のデイサービスを利用した時に、「勤務の間に顔を出すと嬉しそうにしていたよ」と聞くと、親孝行できたようで私も嬉しかった。

息子は電気関係の学校に進学し、卒業論

文の研究テーマは「見守りシステム」。高齢者等、部屋で倒れたり、転んだりしたら、職員等に知らせるといふのを友達と研究しているらしい。娘も息子も選んだ道は違ふが、高齢者や身体の弱い人の役に立つ生き方だと思ふ。祖母を見ていて、子供達なりに感じたものがあつたのでしょうか。

今年の1月。心臓が悪くなり都城市郡医師会病院に救急搬送された時、不安で胸が押しつぶされそうだったが、救急隊員の1人は知人のKさん。あと1人は息子の友達でかなり気持ちが落ちつく事ができました。

しかし容態は手術しても良くはならず、私と娘が看病で病院に寝泊まりしていたが、息子に頼み、一旦家に帰る事にしていたその時、静かに息を引きとつた。

長年、町立病院のお医者さん、看護師さん達に、お世話になつた母。

病弱な母の嬉しく、そして、楽しい話の中身は孫の事だけ。

もうどこも痛くも、きつくもない母は天国で、大きくなつた孫を知らない主人の父や知り合いに、今日も話をしていふ事でしょう。

『人間ドック』

高原町在住 ようちゃん

ある年の人間ドックを受けた際のことなのですが、最後の問診で莫根院長先生(当時)から「眼科は専門じゃないけど、眼底写真にほんの少しだけ出血があるような気がするの、専門の病院で診てもらつて…」と言われ紹介状まで書いていただき、その日すぐに小林市の眼科専門病院を受診しました。念のための受診でしたが、その眼科専門

病院の医師の話にとつても驚かされました。

強度の近視の人は、眼球がフットボールのように前後に引っ張られているため角膜が薄くなつていふ部分があり、私の場合そこに小さな穴が空いており、ほんの少し出血していふとのこと。「このままほつておくと、ボールや手が当たるなどのちょっとしたことで、その穴が原因で網膜剥離になつてしまふ場合もある」と説明をされた後、「しかし長年、眼科医をしていふけど人間ドックで見つてもらつた人は初めて。運が良かったですね」と言われました。

すぐに穴の空いていふ部分をレーザーで焼き付けてもらい穴が大きくならないうに処置をしていただきましたが、この治療は痛くもなんともありませんでした。

帰りに、眼科専門病院で書いてもらつた紹介状の返事を持って高原病院に行きましたが、院長先生からも「僕も人間ドックで見つたのは初めてです。良かったですね。網膜剥離になるとシャッターが降りたようにその部分は見えなくなりますからね…」と言われ、改めて自分がとつても幸運だつたと思ひました。一方で看護師さんからは、「紹介状をもらつても行かない人も多くて、その結果更に悪化してしまふ人も多い」と聞き、とつても驚きました。

当たり前のことなのですが、自分の健康は自分が一番考えるべきなのです。痛さや辛さをこらえなければならぬのも自分なのです。病院の先生方、看護師さんを含めたスタッフの皆さんはそのために頑張つて頂いていふことを忘れてはいけません。まあ、私も「痩せなさい」と言われてもなかなか痩せられずおりますので、大きな事も言えないのですが…。

以後、友人知人達に私の経験を話して高原病院での人間ドック受診を薦めていふます。

『ありがたい場所』

高原町在住 福澤卓志

創立70周年おめでとうございます。高原病院は、私も幼少期大変お世話になりましたが、愛する祖母を最後まで献身的に看病して頂きました。祖母は、お喋りが大好きで、お見舞いに行くと楽しそうに病院生活を話してくれました。看護師の皆さんも祖母に優しくして下さり、仲良く過ごさせて頂きましたので、入院中も退屈することなく過ごせていたようです。そんな祖母は、紅白歌合戦が大好きで、除夜の鐘も院内で聞き、満足して眠りにつき翌朝息を引き取りました。

自宅には戻れませんでした。皆様から温かく見守られましたので、結果的に幸せな亡くなり方をしました。私にとって高原病院は家族を見守り、親身になって世話を下さるありがたい場所です。

これからも町内外から求められる高原病院であり続けて頂きたいと思っています。応援しております。

『3階病棟での美しい思い出』

高原町在住 永峯恵子

私には町立病院3階病棟の中で今は亡き父との美しい思い出があります。

平成21年8月、父は83才、何度目かの入院をしていました。当時は現在のようにウイルス感染などとは無縁、病院体制も厳しくなくつき添いや面会、そして、着替えも直接部屋に届けることができました。

患者さんや家族の方とも和気あいあいと

して、時には高校野球の熱戦に一喜一憂したり、また、時にはヨーグルトか、プリンだったのでしょ、隣のベッドのおじちゃんに「どうぞ」って食べてもらったら、ものすごい気持ちを込めて「あーっ!!こげなうんめもんがあったっじゃろかい」と「おいしかった。ありがとうー」って言って下さいました。あの「あーっ!!」という心から喜んで下さっているような声を今も忘れることができません。それ以来、何でもおいしい、嬉しいと思う気持ちを持ち、感謝を表現できる人になろうと思うようになりました。

家族が入院しているという状況の中でも付き添いさん同士で悩みを話したり、お互い励まし合って死と向き合わなければならぬ場所でありながらも明るい感じで助けられました。

そんな折、まつり高原花火大会の日、父母にも美しい花火を見て欲しいと思い、母を連れて病棟に入りました。昔は毎日の生活が精一杯で花火を見に行こう等と全然余裕はなかったと思います。だから、この日は朝から降ったりやんだりの雨模様でしたが是非とも打ち上げ決行をしてほしい願いでいっぱいでした。最初で最後、たったの一度夫婦で見てもらいたい、思い出を作してほしいと切なる気持ちが届いたのでしょか!!時間になるにつけ暗い雲が流れていきました。

実際に待ち構えていると、「ドーン」と大きな音と共に病室の大きな窓の向こうが一面パーッと明るくなり、それは、それは大きな大輪の花が広がりました。ものすごくきれいで花火の輪が下に見えるのです。花火の地平線、今まで見たことのないすばらしい光影でした。今ではお馴染みのドローンで間近で撮ったような不思議さで大感激・大興奮でした。

父母の目には、2人の心にはどのように映ったのでしょうか。私の目には涙が溢れてきて、父に感想を聞くこともできませんでした。しかし、確実に父との美しい思い出をつくってもらえました。当時の実行委員長、スタッフの方々、花火師さんの決断に感謝しきりです。

現在、コロナ感染で亡くなる方もおり、生活が一変しました。子供達の元気な顔も見れず、マスク着けての通学、授業。大人も全員がマスク姿で仕事と大変な世の中になりました。

先生や看護師さん、スタッフの方々、患者さんの対応業務だけでも大変なのに、感染防止対策等本当に心労が絶えない中、受診すると明るく丁寧な対応をして下さり、それだけで元気になれるような気がします。

町立病院での3階病棟、親子で見た美しい花火の思い出から12年が経ちます。

母は健在で88才になります。受診した際は自分で受け付けしています。看護師さんや先生にいろんなおしゃべりをして大変ご迷惑をおかけしています。しかし、このおしゃべりをする事で元気をもらっていることが良き思い出として募らせ、日々に繋がっているように思えます。本当に有難きことです。

かかりつけ病院として今後とも宜しくお願ひします。

『地域の皆さんの健康を守って
ください』

東京都在住 ともりん

昭和27年くらいに重い病気で入院していた患者の姪(伯母から見て妹の娘)です。

私が小学生の頃、私は母や祖母・伯母に昔話と称して田舎の高原の話の聞くのが大好きでした。昔話には、決まって高原病院のことが出てきました。

当時一家は花堂に住まいがあり、伯母は元気に学校に通う1年生でした。しかし病を患い、長い入院を余儀なくされたとのこと。当時の苦労を祖母から聞きました。母からは、病院の裏口からお見舞いに行ったり、祖母が伯母に付きっきりだった為に寂しい思いをしたりした毎日を聞きました。その後、伯母は障害が残ったものの一命を取り留めて退院しました。一家は大阪に居を移しましたが、伯母にとって、高原の地は特別大切な思い出の地。入院中のこと等思い出話を沢山聞いています。

病院への感謝の思いは、現に患者としてお世話になってる人がメインかもしれませんが、ですが、伯母のように時間・場所を超えて感謝の思いがずっと残っていたり、話を聞いて病院へ感謝の気持ちが生じる私のような人がいたりします。

色々な人の思いのもと、歩んできた70年だと思ひます。

これからも、地域の中核病院として地域の皆さんの健康を守ってください。

皆様、ありがとうございました



令和3年 町立病院屋上からの霧島山